

感情変化動詞の語彙と文法的特徴

山 岡 政 紀

1. 感情動詞分類について

〈感情表出〉という文機能*¹を基準とする感情動詞分類は、山岡（1998）で提案した。ここでは、その概略を述べ、本稿のテーマである「感情変化動詞」の定義を再確認する。

〈感情表出〉とは、話者が発話時の自らの感情を表出する文機能である。(1) a. ~ c. いずれも〈感情表出〉文である*²。

- (1) a. ああ、腹立たしい。 + [I]^{Ex}
 b. ああ、腹が立つ。 + [I]^{Ex}
 c. ああ、腹が減った。 + [I]^{Ex}

いずれも経験者格*³は第1人称に指定されている。文の時制意味は「現在」である。特に後者は形容詞一般の特徴だが、動詞においては状態動詞の特徴とされている。ここで、b. のように、文の述語がル形終止となった場合の文機能が〈感情表出〉となる動詞語彙を(A)「感情表出動詞」とした。「痛む、むかつく、いらいらする、癪に障る」などはこれに当たる。

一方、c. のようにル形終止ではなくタ形終止の場合に〈感情表出〉となる動詞語彙が(B)「感情変化動詞」である。一般に過去を表す時制辞 -ta を用いながら、変化後に維持されている感情状態を表現し、そのため時制意味が現在となる特殊な動詞である。「あきれた、困った、足がしびれた、肩が凝った」などの述語がこれに当たる。先行研究では、砂川（1986）や、工藤（1995）などによって、言語現象の指摘はなされているが、理論的な位置づけは十分に行われていない。

そして、ル形終止でもタ形終止でも〈感情表出〉とならず、しかも語彙的意味としては(A)、(B)と同様の意味特徴を持つ動詞語彙を、感情の動きを客観的に描写する動詞として(C)「感情描写動詞」と呼んだ。「怒る、悲しむ、苦しむ、喜ぶ、苛立つ」などがこれに当たる。(C)を用いて話者自身の感情を表出しよ

うとする場合は、テイル形をとらなければならない。その場合も、人称指定が発生しないため、人称指定による第1人称経験者格の省略はできない（文脈や場面などからの省略はあり得る）。(A)～(C)を総称した全体が「感情動詞」である。筆者の動詞分類は文機能を基準とするもので、感情動詞と対立する他の動詞範疇は、意志動詞、描写動詞、叙述動詞である。下位範疇など、詳細は山岡（未発表）3.2節で論述しているので、ここでは省略する。

次に、感情動詞の語彙の意味特徴を詳しく見ていくと、(A)感情表出動詞、(B)感情変化動詞、(C)感情描写動詞の三分類にわたって、語彙的意味による横断的な交差分類があることに気づかされる。意味特徴については、1思考・2情意・3感覚・4知覚の四種に分類できる。この四種を区別する文法上のテストとして、山岡（未発表）3.2節では三つの文法的特徴を提案した。第一に程度副詞の修飾が可能であるか、第二に補文を承けることができるか、第三に経験者格の部分ガ格*4を取るか、以上の三つである。

[表] は両者の交差分類を一覧にし、意味特徴の四分類をテストする三項目を加えたものである。

[表] 感情動詞の文機能論的三分類と意味特徴による四分類について

感情動詞	1 思考	2 情意	3 感覚	4 知覚
A 感情表出動詞 [I]+V-ru	A-1 思考表出 ～と(～く)思う	A-2 情意表出 困る	A-3 感覚表出 胃が痛む	A-4 知覚表出 見える
B 感情変化動詞 [I]+V-ta	B-1 思考変化 ひらめく	B-2 情意変化 あきれれる	B-3 感覚変化 肩が凝る	
C 感情描写動詞 I + V-tei-ru	C-1 思考描写 ～を思う	C-2 情意描写 怒る	C-3 感覚描写 顔がほてる	C-4 知覚描写 見る
程度副詞修飾	×	○	○	×
補文を承ける	○	×	×	×
部分ガ格	×	×	○	×

※左端の欄に記載されている文型表示では、[I]は省略可能な第1人称経験者格、Iは省略不可能な第1人称経験者格（文脈や場面などによる省略は別とする）、V（動詞部）の後には、テンス・アスペクト形式（いずれも異形態あり）を表している。

[表] に記した通り、意味特徴による四分類との交差分類によって、感情変化動詞は思考変化動詞・情意変化動詞・感覚変化動詞に三分類される。知覚変化動詞に当たるものは見当たらず、その理由もはっきりしていない。

2. 感情変化動詞文が〈感情表出〉となるための条件

〈感情表出〉の命題内容条件の初期条件は以下のようになる。

〈感情表出〉の命題内容条件（初期）

- ① 述語が感情性述語であること
- ② 主語が第1人称経験者格であること ([I]^{Ex})
- ③ 非過去時制辞を接続すること
(ただし、述語が感情変化動詞の場合は、過去時制辞を接続すること)
- ④ モダリティ付加辞*⁵を接続しないこと
- ⑤ アスペクト接辞 -tei- を接続しないこと

この③のカッコ内の記述は予め、感情変化動詞の特殊な時制特徴を考慮したものである。この初期条件と、①の感情性述語をA感情表出動詞に指定したものは、山岡(1999)で既に示した。そして、感情性述語をB感情変化動詞にすると、以下のようになる。

〈感情表出〉の命題内容条件

- B** 述語が感情変化動詞の場合
- ② 主語が第1人称経験者格であること
 - ③ 過去時制辞 -ta を接続すること
 - ④ モダリティ付加辞を接続しないこと
 - ⑤ アスペクト接辞 -tei- を接続しないこと

次に挙げる例文は、いずれも上記の命題内容条件を満たし、〈感情表出〉の文機能を有している。

(1) 「思ったより元気そうね。ホッとしたわ (+[I]^{Ex})」 (女社長)

(2) 「ああくたびれた。(+[I]^{Ex}) なかなか運搬はひどいやな。」 (セロ)

感情変化動詞も、感情表出動詞と同様、〈感情表出〉文で用いられることが圧倒的に多く、第1人称に指定された主語は省略しやすい。(1)、(2)においても、第1人称経験者格 (+[I]^{Ex}) は含意されている。

そして、過去時制辞 -ta が用いられているにもかかわらず、いずれの例も、

過去の情意ではなく発話時現在の情意を表出している。(3)は、(1)と同じく情意変化動詞「ホッとする」を述語とし、過去時制辞 -ta も用いられているが、第3人称主語が明示され、モダリティ付加辞「ようだ」も用いられており、上記の条件に二つ反している。この場合は、〈事象描写〉となる。

(3) 私が言うと、崔はホッとしたようだった。(一瞬)

(4)~(6)はいずれも情意変化動詞「がっかりする」を述語とする文だが、〈感情表出〉は(4)のみである。(5)は(3)と同様、〈事象描写〉である。

(4) 純子つまらなそうに、「がっかりしたわ。(+[I]Ex) 髪はモジャモジャ、ヒゲはのび放題、ボロボロの服に、足を鎖か何かでつながれて来るかと思ったのに」(女社長)

(5) 女は顔をそむけ、ひきつったような表情をうかべた。がっかりしたのだろう。(砂の女)

(6)に関しては、「ものだ」はモダリティ付加辞の働きをしておらず、削除しても、意味は変わらない。となると、この文は上記の条件に何ら反していないことになるが、文脈上、過去の感情を回想したものとなり、従って文機能は〈感情表出〉ではなく、客観的なできごととして描写する〈事象描写〉となる。

(6) 「恭子さんが結婚したときには、ぼくはずいぶんとがっかりしたものですよ。ご主人はレスラーみたいに大きな人だったそうですね」(砂の上)

上記の条件には時制辞に関する条件が含まれているが、時制意味に関する条件を明記していない。時制意味は入力側ではなく出力側の特徴と考えるからである。従って、この条件は〈感情表出〉という文機能が発動するための必要条件ではあるが、十分条件ではない、ということになる。

3. 感情変化動詞のアスペクト的意味特徴

(A)感情表出動詞、(B)感情変化動詞、(C)感情描写動詞の相互の境界に関してはかなり厳格な峻別が可能だが、動詞分類全体の中に位置づけるとなると、決して単純ではない。それぞれの語彙的意味に含まれているアスペクト上の特徴が、〈感情表出〉の中で用いられる場合と、それ以外の場合とで異なるからである。〈感情表出〉の場合を除外して考えるとすれば、おおよそ(A)「感情表出動詞」は継続動詞の一種、(B)「感情変化動詞」は変化動詞(または瞬間動詞)*⁶の一種と言える。ただし、このように言えるのは、いずれも〈感情表出〉以外の文においてである。また、(C)「感情描写動詞」には両方が混在している。

例えば第3人称主語である(1)においては「減る」という事象が継続しているわけではなく、結果が残存していると解釈するのが自然である。これは変化動詞の特徴である。

(1) ひろしは腹が減っている。

(1)と、(1)をタ形にした(2)とでは、意味が全く異なっている。

(2) ひろしは腹が減った。

両者の意味の異なりは、「ドアが開いている」と「ドアが開いた」の意味の異なりと同様の関係である*7。

ところが、主語が第1人称である〈感情表出〉の場合には、タ形とテイル形の意味が接近している。このことは特殊な現象であり、これを見る限り、通常の変化動詞とは性質が異なることがわかる。

(3) 私は腹が減った。

(4) 私は腹が減っている。

このような感情変化動詞のアスペクト的意味特徴について、感情変化動詞を用いた〈感情表出〉の実例である2.の(1)「ホッとした」、(2)「くたびれた」、(4)「がっかりした」などから帰納して、以下のように言うことができる。

第一に、この種の動詞の語彙的意味が表すものは、「何らかの外的要因によってもたらされた感情の変化」である。そして、それが-taを伴う文は、「過去に起きた変化そのもの」(仮に意味 α とする)と、「その変化結果が持続する現在の状態」(同じく意味 β とする)とが、両方同時に表されているということである。そして、特に意味 β によって〈感情表出〉たり得るのである。

第二に、感情の変化が生じた過去というのは、現在と隣接する直近の過去であること。一日前に起きた感情の変化の回想であっては、意味 β は含意されず、もはや〈感情表出〉とならない。従って、2.の(6)のような〈事象描写〉となる。

第三に、いずれも感情の極めて直接的な表出であるためか、概して文構造が単純である。2.の(2)、(4)のように、〈感情表出〉文を独立語文のように発して、その後、感情の変化をもたらした外的要因について整然と述べる、といった例が非常に多い。

このように、過去時制辞を伴いながら時制意味が現在となり、現在の状態を表す例は、日本語ではこの種の文しか見当たらない。動作動詞の一種としての変化動詞(瞬間動詞)は、-tei-ruを接続することによって、意味 β を表すことはできる。例えば、「窓が開いている」という文は、現在の「窓が開いている状態」の表現として用いられる。しかし、この文には意味 α は絶対に含意されない。

一方、意味 α の表現である「窓が開いた」という文は、意味 β を含意することはあり得ない。

次に、感情変化動詞の意味特徴による下位分類に従って、語彙、用例とその発話機能について検討を行う。

3. 思考変化動詞文による〈思考表出〉

例文(1)は副詞「とっさに」によって、この文が表現する思考の変化が、直近の過去に起きたものではなく、回想であることを示しており、従って、〈思考表出〉とは言えないが、参考までに挙げた。

- (1) とっさに、すばらしい考えがひらめいた。(+[I]Ex) 子供をつかまえて、楯にすればいい！ 子供を人質にして、やつらの接近をはばむのだ！…… (砂の女)

従って、「とっさに」を外し、「ひらめき」の直後の発話として(2)を想定すれば、〈思考表出〉となる。

- (2) すばらしい考えがひらめいた。(+[I]Ex) ……

この文は、後に続く「すばらしい考え」の内容を命題として、聴者に対しては、《主張》の発話機能*⁸を有する可能性が高い。当然、この発話は、聴者が保持せず、かつ不確実な命題であるという語用論的条件のもとで発話される可能性が高いからである。

以上をまとめた記述は次のようになる。

B-1 思考変化動詞文

- | |
|--|
| 【主題】 [I]Ex |
| 【命題】 + ([Ob]/[補文]コト) ガ/ヲ/ニ+V-ta |
| 【語彙】 (～ヲ) 思いつく, (～ニ) 気がつく, (～ガ) ひらめく, …… |
| 【文機能】 〈思考表出〉 |
| 【発話機能】 《主張》など |

4. 情意変化動詞文による〈情意表出〉

既に、2. で用例として挙げた(1), (2), (4)は、情意変化動詞文による〈情意表出〉の例である。次の(1)~(3)も同じく典型的な〈情意表出〉の例である。

- (1) 「これはあきれた。(+[I]Ex) だれも知らないのですか。シマのあるウマのことをなんていうんでしたかねえ？」 (ブン)

(2) 相手は佐川という頑丈な男だ。結納はまだだが、とにかく話だけは決めてホッとしたよ。(+[I]Ex) 母もふじ子も安心したようだ。(塩狩峠)

(3) 「ああ、驚いた。(+[I]Ex) まだまだとても譲治さんとは踊れやしないわ、少し内で稽古なさいよ」(痴人)

この構文では大半の例において、情意の変化そのものに当たる意味 α が非常に弱く、意味 β 、つまり現在持続する情意の状態を意味する比重が大きい。これらは、本来「変化結果の持続」とは言い難いが、この構文を借りて表現しているものと言える。(4)~(6)は「くたびれる」の例である。

(4) そして一日遊び抜いて、日が暮れるとガッカリ疲れて「ああ、くたびれた (+[I]Ex)」と云いながら、ビッシヨリ濡れた海水着を持って帰って来る。(痴人)

(5) 「何でもいいから早くしてくれ。いい加減くたびれたよ (+[I]Ex)」(女社長)

(6) 「やい、いいかげんにしろ」と二人のうしろでどなる声が出た、「なんの相談か知らねえが、こっちはいいかげん待ちくたびれたぜ、二人とも立ったらどうだ」(さぶ)

(4)は肉体の感覚的な意味も読み取れるが、(5)、(6)は純粹に情意を表出している。(6)は複合動詞の例だが、「疲れる」などでも複合動詞の例は見られる。

(7)~(11)についても、「弱る、困る、参る」のそれぞれの瞬間が特定されるわけではない。つまり、情意の変化そのものの意味 α が非常に弱い。もっぱら意味 β 、つまり現在持続する情意の状態を表している。これも「変化結果の持続」とは言い難い。

(7) 「おまえのかど出にあたって、なんか祝ってやりたいんだが、弱ったな。……」(路傍)

(8) 伊木は狼狽した。「この頭で教壇に立たなくてはならぬのか、これは弱った」と、伊木は口の中で呟いた。(樹々)

(9) 「どうも困ったな。先生にそういわれてしまっては……」(路傍)

(10) 「疲れたよ。時間を使って、金を使って、いったい何のためにやるかわからんよ」(一瞬)

(11) 憬子「参ったな……。壊れてないよ」(君と)

(11)はシナリオ資料から採ったもので、憬子の部屋を訪ねてくる男性への言い訳づくりのためにステレオを壊そうとするのだが、なかなか壊れず、CDの音楽が

流れてしまう場面である。要するに独白であって対人的な意味を持たない発話である。

以上をまとめ、他の語彙を含めた記述は次のようになる。

B-2 情意変化動詞文

【主題】 [I]^{Ex}

【命題】 (+ [Ob] ニ／ガ) + V-ta

【語彙】 あきる、あきれる、あせる、安心する、怒る、驚く、困る、幻滅する、さとり、疲れる、くたびれる、懲りる、弱る、参る、わかる、……

(成句) 頭に来る、いやになる、腹が決まる、……

(擬態語) ガツカリする、サッパリする、スッキリする、スツとする、ホツとする、……

【文機能】 〈情意表出〉

【発話機能】 《情意表出》など

これらの発話機能は一括して《情意表出》としたが、積極的に対人的情意を聴者に伝えようとするような発話においては、より踏み込んだ発話機能の記述が可能になるだろう。例えば、(1)では聴者への《失望の表出》となっているし、(5)、(6)では《催促》ともなる。

5. 感覚変化動詞文による〈感覚表出〉

この構文の特徴は、感覚形容詞文*⁹、感覚表出動詞文*¹⁰の場合と同じで、話者の肉体の部分が表現されるか含意されている、ということである。「くたびれる」、「疲れる」に関しては、任意の肉体部分をガ格で取ることができる。次に例文を示す。

(1) 「足が痺れたんでね (+ [I]^{Ex})」と栄二が答えた、「ちょっと坐り直したただけだよ」 (さぶ)

(2) 「腹が減った (+ [I]^{Ex})」と私は言った。「ねじでも食べられちゃいそうだ」 (世界)

この種の構文では、「感覚の変化」に当たる意味 α がほとんどなく、もっぱら意味 β 、つまり現在の感覚の状態を表すものである。

以上をまとめ、他の語彙を含めた記述は次のようになる。

B-3 感覚変化動詞文

【主題】 [I]^{Ex}

【命題】 + [Ob] (=肉体部分) ガ + V -ta (+ [Ca] ノセイデ)

【語彙】 {任意} が + くたびれる, {肩} が + 凝る, {手足, 皮膚等} が + 痺れる, {任意} が + 疲れる, {頭} が + のぼせる, ……

(成句) 脚がつる, お腹が空く, のどが渴く, 腹が減る, ……

(擬態語) サッパリする, ……

【文機能】 〈感覚表出〉

【発話機能】 《感覚表出》 など

さて、本来現在の状態を表現する -tei-ru によって表現した(3)は、(2)と同じと言えるだろうか。

(3) 「本当に腹が減ってるんだ」と私は言った。「こんなに腹が減ったのは久しぶりだな」 (世界)

(3)では、たまたま話者自身の感覚を表していることになっているが、-tei-ru の文には主語の人称の制約がなく、異なる文脈のもとでは第3人称主語に関する〈状態描写〉ともなり得る。一方、(2)のような -ta の文を用いて、話者以外の人物の現在における感覚状態を表すことはできない(文学作品などで語り手が登場人物に感情移入して表現するものは例外とする)。つまり、テイル形の場合、主語が明示されていないと、文機能が定まらず、第1人称経験者格の主語が明示されるか、文脈や場面などの情報で示されなければ、〈感情表出〉とはならない。

それに対し、ル形による〈感情表出〉文は、命題内容条件の充足を前提とする文機能として、〈感情表出〉の機能が発動するものである。つまり、主語が明示されていなくても、命題内容条件②「主語が第1人称経験者格であること」は、類推によって補われて〈感情表出〉となるのである。

発話機能としては、《感覚表出》として一括したが、当然、語用論的諸条件次第で、(1)は《釈明》、(2)は《催促》といった、より高次の発話機能が発動することは言うまでもない。

6. まとめ

感情表出動詞と感情変化動詞との対立は、〈感情表出〉という文機能が成立する際の述語の時制辞の違いによるものであった。本稿では、それは語彙的意味のAspect上の特徴と関連があることを主張した。筆者は、山岡(未発表)でア

スペクト的動詞分類とは全く異なる，文機能との関連を基準とする動詞分類を提案しており，「感情動詞」もその分類による一つの範疇だが，その下位分類においてはアスペクトの関与を認めざるを得なかったということである。それにしても感情変化動詞は，従来のアスペクト的動詞分類にも収まりきらない特殊な特徴を示していることは強調しておかなければならない。

注

- * 1 話者が発話に際して各文に担わせている対人的機能を文機能と呼ぶ。文機能は特定の言語形式に依存せず，文を構成する構造的要素群から複合的に発生する意味範疇である。例えば，〈命令〉や〈意志表出〉は従来，文末のモダリティ形式の意味とされているが，実際には述語動詞語彙の選択制限や主語の人称といった構造的要素群から複合的に規定される。このような規定法によれば，〈属性叙述〉，〈事象描写〉，〈感情表出〉など，特定の文末形式に対応しない機能的意味をも文機能として対等に規定することが可能となる。山岡（未発表）で詳しく論じている。
- * 2 例文中の+[I]Exは，形式上表れていないが，実際の発話においては含意されている，名詞句相当の人称意味（ローマ数字）と意味格（添え字）を表示したものである。
- * 3 名詞句の述語に対する意味関係として，筆者は意味格を用いている。今日では変形文法に採用された意味役割が一般的だが，筆者の一連の研究で必要とするのは，格文法における基礎的な体系で十分である。本稿で用いるのは，経験者格（Experiencer：略称 Ex），対象格（Object：略称 Ob），原因格（Cause：略称 Ca）である。
- * 4 筆者は山岡（未発表）1. 4節で，いわゆるハガ構文「象は鼻が長い」の「鼻が」のように，主題（ここでは「象は」）の部分に当たるガ格名詞句を「部分ガ格」と呼んでいる。次に，感情性述語は必ず経験者格を取るが，感覚形容詞，感覚動詞は，経験者格の部分ガ格として，肉体部分の名詞句を取るという文法的特徴によって規定される。
- * 5 述語の時制辞の後に付加するモダリティ接辞のことを筆者はモダリティ付加辞と呼んでいる。ダロウ，ヨウダや，伝聞のソウダなどがこれに当たる。
- * 6 金田一（1950）では，テイル形の意味が結果残存の意味になる動詞を「瞬間動詞」と呼んだが，これに対して奥田（1978）では，「太っている」や「はげている」など，結果残存ではあるが，瞬間的動作ではない例が提示された。その後，これらが主体の状態変化を表す動詞であることから，「変化動詞」あるいは「主体変化動詞」などの呼称が広く用いられるようになった。本稿の「感情変化動詞」については，語彙的意味として経験者の感情の変化を表しており，アスペクト的分類では変化動詞に含まれることになる。
- * 7 厳密には，(2)が適格なのは小説の語りの文体のように，感情移入する場合に限られており，本来なら(2)'のようにモダリティ付加辞を付けなければならない。
(2)'ひろしは腹が減ったらしい。
- * 8 山岡（未発表）2. 2節において筆者が提案した用語。命題内容条件及び語用論的条件によって成立する対人関係上の機能を指す。《 》で表示し，〈 〉による文機能

と区別する。誠実性条件を考慮しない点で、Searleの発話内行為 (illocutionary act) と異なる。語用論的条件の充足が前提となると文形式だけでは発話機能は決まらないことになる。従って、枠内の記述においては、標準的な発話機能に「など」を付けて表示する。

- * 9 感覚形容詞は、感情形容詞の下位分類の一つで、〈感情表出〉の一種である〈感覚表出〉の述語となる形容詞語彙である。経験者格の部分ガ格として、肉体部分の名詞句を取るという文法的特徴がある。それを伴った語彙例としては、「胃が痛い、背中がかゆい、頭が重い」などがある。
- * 10 感覚表出動詞は、感情表出動詞の下位分類の一つで、〈感情表出〉の一種である〈感覚表出〉の述語となる動詞語彙である。1. の [表] の A-3 に当たる。経験者格の部分ガ格として肉体部分の名詞句を取るという文法的特徴がある。それを伴った語彙例としては、「胃が痛む」の他に「歯がうずく、目がチカチカする、背筋がゾクゾクする」などがある。

参考文献

- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』第53, 54号 むぎ書房 (奥田 (1985) 所収 105-143)
- (1985) 『ことばの研究・序説』 むぎ書房
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『國語學』第15集 (金田一編 (1976) 所収 5-26)
- 編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- 砂川有里子 (1986) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ2 する・した・している』くろしお出版
- 山岡政紀 (1998) 「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語日本文学』第8号 創価大学日本語日本文学会 (1)-(17)
- (1999) 「感情表出動詞の文法的特徴」『日本語日本文学』第9号 創価大学日本語日本文学会 (47)-(59)
- (未発表) 「日本語の述語と文機能の研究」1.4 節「格助詞と意味格」, 2.2 節「〈文機能〉と《発話機能》」, 3.2 節「文機能論からの形容詞分類」

用例出典

(女社長) 赤川次郎「女社長に乾杯!」, (セロ) 宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」, (一瞬) 沢木耕太郎「一瞬の夏」, (砂の女) 安部公房「砂の女」, (砂の上) 吉行淳之介「砂の上の植物群」, (ブン) 井上ひさし「ブンとブン」, (塩狩峠) 三浦綾子「塩狩峠」, (痴人) 谷崎潤一郎「痴人の愛」, (さぶ) 山本周五郎「さぶ」, (路傍) 山本有三「路傍の石」, (樹々) 吉行淳之介「樹々は緑か」, (世界) 村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」以上, CD-ROM版「新潮文庫の100冊」より

(君と)「君といた夏」1994年8月1日/フジテレビ系放送, 『週刊テレビ番組』東京ポスト刊・所収テレビドラマ・シナリオより

(やまおか・まさき, 本学助教授)